

戦前朝鮮における靖国神社遺児参拝

松 岡 勲

元立命館大学非常勤講師

목차

- 1.はじめに
2. 第二次世界大戦中の靖国遺児参拝
3. 戦前朝鮮における靖国遺児参拝
4. おわりに

1.はじめに

一昨年12月に行われた、翰林大学校日本学研究所の「靖国」に関するワークショップで、1950年代の靖国神社遺児参拝について報告した。その時、パネラーの南相九（東北アジア歴史財団）さんより、「戦前朝鮮においても靖国神社遺児参拝があった。その件について、韓国では研究がなされていない」という貴重な情報と示唆を頂いた。

その後、南さんから、韓国国立中央図書館の検索サイトに朝鮮の靖国遺児参拝の情報が一部掲載されていると教えて頂き、そこから、私の戦前朝鮮における靖国遺児参拝の調査が始まった。

1) 韓国中央図書館検索サイト <https://www.nl.go.kr/>

2. 第二次世界大戦中の靖国遺児参拝

前回報告した1950年代の靖国遺児参拝は、第二次世界大戦中の遺児参拝を踏襲していた。戦前の参拝は、恩賜財団軍人援護会が1939年から1943年まで毎年1回ずつ行った。それは全都道府県・海外植民地（台湾、朝鮮、満州、関東州、樺太等）に及び、総計1万8千人の戦没者遺児が靖国神社に集められた。

軍人援護会は1938年に皇室の下賜金によって作られた軍人援護の組織で、戦没者の遺族、傷痍軍人ならびに出動軍人の家族等に対する物心両面にわたる援護を行った。1943年の第5回参拝には、全国各地から4859名の遺児が参加した。1944年からは戦局の悪化と米軍の空襲の激化で靖国神社参拝事業は中止され、各都道府県の護国神社に場所が移された。各都道府県の軍人援護会は児童の参拝の感想文集『社頭の感激』（多くの県で同名のタイトル）を発行し、現在も文集が多く残っている。

第1回から第5回の参加遺児数については、斉藤利彦著『「誉れの子」と戦争～愛国プロパガンダと子どもたち～²⁾によると次のようになる。大量の戦没者遺児が靖国神社に動員され、皇国主義と軍国主義思想に染められた、一大プロパガンダだったことが分かる。

第1回（1939年） 1324人（『高知県軍事援護誌』軍事援護会高知県支部）

第2回（1940年） 3191人（『社頭の感激』軍事援護会山口県支部）

第3回（1941年） 3821人（『社頭の感激』軍事援護会茨城県支部）

第4回（1942年） 5000人を超える。（『朝日新聞』1942年3月26日）

第5回（1943年） 4859人（『写真週報』第71号、1943年4月7日）

2) 斉藤利彦著 『「誉れの子」と戦争～愛国プロパガンダと子どもたち～』（中央公論新社）

3. 戦前朝鮮における靖国遺児参拝

戦前の朝鮮において、戦没者遺児の靖国神社遺児参拝はどのように行われたのか。韓国国立中央図書館のサイトに、戦前の朝鮮総督府の官報的役割だった「毎日新報」（言語は朝鮮語）があり、「毎日新報」の記事を歌手で俳優の趙博さんに翻訳をしてもらい、確認できた。この翻訳は資料として最後につける。（同サイトには「朝鮮時報」の遺児参拝記事も掲載されている。）また立命館大学図書館（O I Cライブラリー）に、これも総督府の機関紙であった「京城日報」（言語は日本語）³⁾、大阪府立図書館には「大阪朝日新聞」「大阪毎日新聞」の「朝鮮版」（言語は日本語）がある⁴⁾。遺児参拝情報については塚崎昌之（立命館大学非常勤講師、日本近現代史）さんに大変お世話になった。以下はこれらの情報を整理した戦前朝鮮の靖国神社遺児参拝の実態である。

<朝鮮靖国神社遺児集団参拝>

当時日本の植民地であった朝鮮においても、1939年から1943年まで5回に渡って、日本人と朝鮮人の戦没者遺児の参加の形で実施された。さらに1944年、1945年は戦局の悪化によって、京城護国神社（1943年10月創建）に戦没者遺児が参拝している。

関連する事項としては、朝鮮における徴兵制度の実施があり、朝鮮人兵士数は塚崎昌之「朝鮮人徴兵制度について」⁵⁾によると次の通りである。後述の靖国参拝児童の戦死した父に軍属（徴用工）が出てくるので、これも含んで考えなければならない。

3) 立命館大学図書館(O I Cライブラリー)所蔵

京城日報(復刻版)(日本語)合本、韓国教育史文献研究院刊

4) 大阪府立図書館所蔵

大阪朝日新聞外地版(復刻版)のうち朝鮮版(日本語)合本、ゆまに書房刊

大阪毎日新聞外地版(復刻版)のうち朝鮮版(日本語)合本、ゆまに書房刊

5) 塚崎昌之「朝鮮人徴兵制度について1、2」(日本戦没学生記念会『わだつみのこえ』152号、153号)

1938年～『志願兵制度』実施 2万7千名

1944年～『徴兵制度』実施 19万名

* 2021年4月に行われた、15年戦争研究会で『子どもたちの靖国～戦後も『少国民』にされた戦争遺児たち～』を報告したが、以下はその際の塚崎昌之さんのサブ報告⁶⁾も参考にした。

(概要)

- ・小学校5年生、6年生の戦没者遺児が対象。
- ・二重橋で宮城参拝、日比谷公会堂式典（厚生省・軍人援護会主催、皇后から『御汝菓』下賜）、靖国神社昇殿、遊就館見学、東京観光（明治神宮・宝物館・海軍館等）。
- ・朝鮮・台湾遺児は阪神観光（伊勢神宮・橿原神宮・桃山陵等）とセットだった。
- ・朝鮮人遺児と日本人遺児は一緒に参拝したが、玉串奉奠はいずれの年も日本人遺児によって行われた。

● 第1回 1939年

- ・1名のみ参加 日本人男子（田代勇、田代藤太郎伍長の息子、小学校6年生）
- ・この年のみ8月参拝。7日に拓務相と面会。

<新聞記事>

『九段の対面に感激の上京 田代君健気に語る』（大阪朝日南鮮版、8月5日）

『小磯拓（務）相から受けた恩情と感激の記念の色紙 九段の父に対面した田代少年の感激』（大阪毎日朝鮮版、8月8日）

『けふ遺児ら社頭の対面 御菓子伝達式に浅香宮殿下台臨 早くも御言葉賜ふ』（京城日報、8月6日）

● 第2回 1940年

- ・この年から3月下旬に変更。
- ・8名（男子3名、女子5名）、内2名が朝鮮人少女（ともに本名）、父は軍属と憲兵補。
- ・出発前に京城神宮参拝後、総督府で南次郎総督が激励。

6) 塚崎昌之「戦前期一靖国神社朝鮮遺児集団参拝の概要」「遺児靖国神社集団参拝：朝鮮人遺児コメント・作文」(2021年4月4日、第244回15年戦争研究会)

- ・参拝前に二重橋前で『皇国臣民の誓詞』を力強く叫ぶ。
- ・参拝後に李王家邸を訪問。
- ・参拝参加者8名（朝鮮日報他各紙、2月17日）

平壤若松小学校五年生故五ノ井淀之助少佐次男	五ノ井潔君
釜山第七小学校五年生故安武平三郎中尉長女	安武由江さん
大邱東雲小学校五年生故臼井道通中尉長男	玉木道實君
全羅南道勝湖里小学校五年生故佐藤満衛少尉長女	佐藤清江さん
大田本町小学校五年生故安井鐘一上等兵長男	安井茂君
全北金堤小学校六年生故谷井弥吉伍長長女	谷井光子さん
忠北青徳小学校六年生故金永喆軍属次女	金貞淑さん
威北茂山南小学校六年生故李珍龍憲兵補三女	李姜姫さん

<新聞記事>

「上京の遺児部隊へ 総督さんが暖かい親心 亡き父に代わって激励」(大阪朝日南鮮版、3月21日)

「(楠木) 正行に劣らぬ忠義 お父さんにお誓ひ 慈父のようなやさしい総督の訓示、靖国の八遺児感激の旅へ」(大阪毎日朝鮮版、3月23日)

「長旅の疲れ吹飛ぶ 社頭対面の喜び！ 入京した半島遺児代表」
(京城日報、3月25日)

「九段の社頭感激の一瞬 御霊呼ぶ柏手 父よ、見てください。 遺児聖なる対面」(京城日報、3月27日)

「李王妃殿下より有難きお言葉 光栄に八遺児感涙」
(大阪朝日南鮮版、3月28日)

● 第3回 1941年

- ・13名（男子9名、女子4名）、内1名が朝鮮人少女（創氏改名・康本光淑）、父の所属は不明。
- ・出発前に朝鮮神宮参拝、朝鮮軍司令部・総督府等を訪問
政務総覧が激励「(楠木) 正行の如くあれ」
- ・参拝前に拓務省訪問、拓務大臣が激励

<新聞記事>

「社頭対面に胸躍らせ 半島の遺児部隊東上」(大阪朝日南鮮版、3月25日)

「秋田拓相に招かれ 自筆の色紙を貰ふ 社頭参拝前に喜びの遺児たち」
(大阪毎日南鮮版、3月28日)

「日の丸の旗に埋もれて出征したあの時の姿を追憶 お父さん〜うるむ瞳 遺
児部隊九段に社頭対面」(大阪朝日南鮮版、3月29日)

「感激に胸轟かせて 英霊と聖なる対面 靖国の遺児・けふ晴れの参拝」
(京城日報夕刊、3月29日)

● 第4回 1942年

- ・一行は14名(写真で確認)。名前が分かるのが10名で、その内訳が男子7名(1名朝鮮人)、女子3名になる。残りの4名は名字のみわかる者(名字だけでは性別不明)が1名、全くわからない者が3名。写真を見ると、男子7名、女子7名なので、不明者の4名は全員女子。内1名が朝鮮人男子(創氏改名・三山泰乙、父は軍属で通訳)。
- ・出発前に朝鮮神宮参拝、朝鮮軍司令部・総督府等訪問。朝鮮軍司令部・政務次官が激励。
- ・参拝前に全遺児、皇居前広場に集合、朝鮮部隊は楠木正成像前で小憩、その後二重橋正面へ、前を馬上の東條英機が会釈して通過という演出、その後天皇が二重橋に姿を現す。
- ・参拝後の李王家邸を訪問、夫妻参列、李王が言葉をかけ、茶菓などを与える。

<新聞記事>

「父在す靖国の杜へ 遺児部隊第一陣東上す」(大阪朝日南鮮版、3月25日)

「おお懐かしのお父様 社頭対面に感激の朝鮮遺児部隊」
(大阪朝日北鮮版、3月25日)

「長途の疲れも忘れ 目をかがやかせて 誉れの部隊入京」
(大阪毎日南鮮版、3月26日)

「皇后陛下 靖国の遺児に御紋菓下賜」(京城日報、3月26日)

「“遠路よく(ら)こそ” 拓務省で勲児を招待」(大阪毎日朝鮮版、3月27日)

「二重橋に龍顔を拝す 竜眼を誉れの半島遺児ら感涙」(京城日報夕刊、3月28日)

「人情首相と少年」(京城日報、3月31日)

● 第5回 1943年

- ・ 9名（男子5名、女子4名）、内1名が朝鮮人男子（本名・蔡奎範）、父は憲兵補。
- ・ 出発前に朝鮮神宮参拝、総督府等を訪問。

<新聞記事>

お父さんに負けるな 板垣司令官”勳児”を激励（大阪毎日南鮮版、3月23日）

『「お父様来ました。」遺児ら九段の杜で背伸び』（大阪朝日西鮮版、3月27日）

『この栄誉を忘れるな 本庄軍司保護院総裁の訓話』（大阪朝日、3月28日）

『今ぞ幽明相見ゆ勳の”父と子” ”ああお父さんだ！” 祈る姿もいぢらしい” 神の子” 勳児部隊昇殿参拝』（大阪毎日、3月28日）

● 1944年、1945年 京城護国神社に参拝

<新聞記事>

『靖国遺児上京参拝中止 今春は各地方にて執行』（毎日新報、1944年3月8日）

『二七日に昇殿参拝 誉れの遺児京城に集まる』

（大阪朝日中鮮版1944年3月27日）

『感激にお土産抱え 誉れの遺児京城にお別れ』（京城日報、1944年3月30日）

『靖国遺児たち昇殿参拝 お父さん、私がここへ参りました 二七日京城護国神にて無言の対面』（毎日新報、1945年3月20日）

<戦中朝鮮靖国遺児参拝：日本人・朝鮮人コメント・作文>

◎ 第1回 1939年8月

▽田代勇 慶尚南道 小学校6年生 故田代藤太郎伍長

『父の英霊と靖国神社で対面できるのはこの上もない歓びであり、おとうさんもさだめし喜んで下さると思います。私は立派な軍人となりお父さんの志をつぎお国のために尽くしたいと思っています。』（大阪朝日南鮮版 8月5日）

◎ 第2回 1940年3月

▽五ノ井清 平壤若松小学校五年生 父五ノ井淀之助少佐

「家名を重んじてお父様の如く軍人となって御国のために働きます。お父さんどうか私をいつまでも守ってください。」(大阪毎日朝鮮版、3月27日)

▽安武由江 釜山第七小学校五年生故安武平三郎中尉

「お父さんと靖国神社でお会いする日をお母さんと毎日指折り数えて待っています。お父さんに会ったらお父さんが戦地にゆかれてからの色々なことを皆お話して聞かせるのです。お父さんもどんなに喜ぶでしょう。」(大阪朝日南鮮版、2月9日)

▽金貞淑 咸鏡北道清津府清徳小学校6年生 父軍属・1939年10月14日死亡。

「私が十一の時に、お父さんは戦争に行きました。優しく元気なお父さんでした。父が亡くなつたと聞かされた時は随分泣きましたが、もうすぐお逢ひ出来るのだと思ふと大変嬉しいです」(京城日報、3月22日)

▽李善姫 咸鏡北道茂川郡茂山南小学校六年生 父一等憲兵補・1933年8月17日死亡

「父は私が小さい時から御国のために働いてゐまして、余りお家にゐませんでしたので、よく判らないのです。お母さんがとても元気で私を可愛がってくれますので少しも淋しくはありません。靖国神社にお参りしたらお母さんの分も一緒に拝んで来る積りです」(京城日報、3月22日)

▽金貞淑・李善姫

「私達は嬉しさと幸福で一ぱいです、朝鮮を出発して今まで皆さまの御好意は涙ぐましいばかりで感謝の言葉はありません、これも皆お父さんのお蔭です、お父さまは私たちを一ぱん可愛がつて下さったのです、私は今日参拝して「お父さま御安心下さい、私は女学校にも入学しました、今からはお母さんに孝行して仲よく暮して行きます。お友だちも皆さんもとても可愛がつて下さいます」と奉告しました。けふの感激は永遠に忘れられません」(大阪毎日朝鮮版、3月27日)

◎ 第3回 1941年

▽西垣武雄 公立尋常小学校5年生、陸軍一等兵父故西垣亮。

「僕のお父さんはいいお父さんでした。お父さんのことはみんな憶えてゐま

す。軍服姿の立派だったこと、出征するときの美しかったこと、昨日のことみたいに憶えてゐます。」(京城日報、3月24日)

▽康本光淑 平安北道公立尋常小学校6年生 平壤西門高等女学校入学。

「一日も早くお父さんにお会いして光淑の元気であることを喜んでいただきたいと思ひます」(大阪朝日南鮮版、3月26日)

「待ちに待った社頭対面の二十八日は今日です、手を净め口をすゞぎ静かに昇殿しました。お父さんのいらつしやるところだと思つて胸がどきどきして来ました。私は□かに黙禱して『お父さんきつと偉くなつてお国のために尽します、私が男に生まれなかつたのを残念ですが女でも立派になつてお国のために尽します、さうしてお父さんやお母さんを安心させます』、と申上げるとお父さんは、にこにこ笑顔を見せ□□ながら『しつかりやりなさい、お父さんは□□(靖国?) □つてゐる』と仰有るやうな気がしました』(毎日新報夕刊、3月31日)

◎ 第4回 1942年

▽五ノ井和夫 五ノ井少佐遺児

「一昨年は兄さんが来ました。今年は僕です。お父さんも、さぞ喜んでみてくださるでせう。靖国神社参拝の時はお父さんに負けない立派な軍人になりますと拝むつもりです。」(京城日報夕刊、3月26日)

▽青木秀子 青木少佐遺児

「家を出る時、お母さんが靖国神社でお父さんにお会いしたら一生懸命勉強して立派な人になりますと、申し上げなさいと言われてきました。早く明後日(参拝日)になればよいと待ち遠しくなりません。」(京城日報夕刊、3月26日)

▽三山泰乙 父趙奎善・通訳・1939年「北支」で死亡。

「僕のお父さんは通訳として出征しましたが、昭和十四年北支で戦死しました。僕はお父さんのやうに立派な皇国臣民になつて日本のために尽す覚悟です。」

(京城日報夕刊、3月26日)

「私は遠く朝鮮から靖国神社まで呼んで下さつた大臣様や大將様にお礼をいひたい気持で一パイです。今日皇后陛下からお菓子を戴いたのも皆

お父さんが日本のために尽したからです僕も明日靖国神社へ行ったら “
きつと立派な日本人になります” と誓ひます」(毎日新報、3月23日)
同じ紙面に「お父さん安心して下さい」という見出しがついた長い文がある
が、活字がつぶれてほとんど読めない。ただ別の記事に当時の植民地
朝鮮の状況がうかがえる「童謡」が載っていたので紹介する。(毎日新
報、3月23日)

童謡「ばんざーい」 ナム・テウ (訳 趙博)

母さんが両手を上げて
『バンザーイ』すれば

赤ちゃんも両手を上げて
『うー』と言い
父さんが両手を上げて
『バンザーイ』すれば

赤ちゃんも両手を上げて
『うー』と言い

赤ちゃんの『バンザイ』は
『うー』が『バンザイ』

◎ 第5回 1943年

▽村上辰巳、好巳兄弟 熊本県八代郡宮原国民学校5年生。

「確かに父上の声 双生児の遺児」父巳義伍長を中支の戦線で失ってから
五年、その時八歳の頑是ない幼児であった兄弟はいま見事に成長して郷
里で母きよのさん(三六)を助けて農業の手助けをしている。」

兄辰巳より「『私たちはこんなに大きくなりました。お母さんのいはれることを
よくきいて勉強したり体鍛えたりしています。どうか安心してください。』と報
告申上げました。奥の方でお父様の喜ばれる声が確かに聞こえました。」

弟好巳より「靖国神社で頭をちっと下げて拝んでゐますと、父が『好巳、よく来た、家はみんな元気に暮らしてゐるか』と神殿の奥から声をかけて下さいました。私は『みな元気です』と答えました。（後略）」（朝日新聞南鮮版、3月30日）

▽蔡奎範 父一等憲兵補

「兄さんが中学に行くやうになり、また弟が国民学校へ今年から入ることになりました、その他お母さんをはじめ皆一同元気ですと御報告申し上げます。」（朝日新聞中鮮版、3月25日）

「お父さんが立派な勲章を戴きこんな立派なお社に祀られただけでも家中で喜んでゐます。このたびは畏くも皇后陛下から御下賜品を又朝香宮殿下から尊いお言葉を戴き思はず涙が出ました、只今お父さんにこのことをしつかり御報告して立派な皇国臣民になるとお誓ひして来ました。」（京城日報夕刊、3月28日）

「この感激は言葉にも紙にも現すことが出来ません、忠君愛国を实践するのみです。」（朝日新聞中鮮版、3月28日）

4. おわりに

朝鮮における靖国遺児参拝を調べて、遺児参拝は朝鮮人の遺児にとって大変残酷なことであつたろうと思った。戦前の場合、対象は国民学校5、6年生である。私の体験から言つて、その時点では日本国家が遺児参拝に何を狙っているかが分からなかつたとしても、後年その政治的意図を認識できた時、まして被征服民族で父を戦争で殺された訳であるから、その屈辱感、怒りはどれだけ大きいのか、想像してあまりある。植民地朝鮮で展開された靖国遺児参拝の酷薄さを痛感した。

以上、戦前朝鮮の靖国神社遺児参拝について、事実関係を追つてきたが、今後の課題についていくつか上げる。戦前遺児参拝を組織した恩賜財団軍人援護会が植民地、特に朝鮮に対してどのように考え、どのような方針で臨んだのかを調べたい。また朝鮮総督府が遺児参拝にどう関わつたのかを調査して明らかにした

い。さらに、遺児参拝体験者の人数が少なく、高齢（90歳を越える）であり、これはなかなか難しいが、韓国研究者のご協力を仰ぎ、朝鮮の遺児参拝体験者を探すことを追求し、聞き取りができればと考えている。

最後に、朝鮮遺児の靖国神社参拝の感想文、新聞のインタビューを読んで、非常に気になったことは朝鮮植民地時代の学校での日本語の強制だった。当時の子どもたちがどの程度日本語が話せ、書けたのか。学校での日本語の強制の実態、強制に対しての子どもや親の抵抗の実態について、この領域は先行研究の蓄積があるので、詳しく知りたいと思った。

<資料・「毎日新報」靖国遺児参拝記事> (翻訳、趙博)

(『毎日新報』昭和十八年三月二八日)

1. 皇后陛下御下賜品

靖国遺児たちに伝達式 厳粛に挙行

【東京電話】靖国神社の社殿に於いて、我が父・我が兄の忠魂と対面する遺児たちの光栄なる日――畏れ多くも皇后陛下の御下賜品伝達式と、朝香総裁宮殿下のご後援を受けた軍人援護会『第五回遺児靖国神社参拝式典』は、第五回『遺児の日』の初日午前10時30分と午後1時30分の二回に分けて、東京日比谷公会堂にて厳守にも盛大に挙行された。同日午前に行われた第1回式典では、朝鮮の26各道府県から参詣した遺児部隊をはじめ、東条陸軍大臣、小泉厚生大臣、奈良軍人援護会長らが列席するなか『皇后陛下御下賜品伝達式』が午前10時半に開式した。

まず宮城遙拝をした後、陸軍戸山学校軍楽隊の伴奏で国歌斉唱、『海ゆかば』を吹奏した後、小泉厚生大臣から御下賜品を伝達する旨の辞が述べられ、続いて、賜ったお菓子が小泉大臣の手から遺児代表・小松眞一（福島県）君に渡された。この時、満場いっぱいの遺児たちの清らかな両眼は、言葉にならない感激で輝いた。続いて、小泉厚生大臣、東条陸軍大臣、島田海軍大臣、本庄軍事保護院総裁から順に温情に満ちた激励のお言葉を賜り、光栄に胸躍らせる遺児たちを代表して小松君が力強く答辞を述べた。伝達式が終わり、続いて午後1時から軍人援護会『第5回遺児靖国神社参拝式典』に入った。

朝田総裁宮閣下には、奈良会長以下軍人援護会会員の奉迎のもと会場に入場された。そして、国歌斉唱のあと畏れ多くも総裁宮閣下におかれては全遺児たちに対して「君たちの元気な顔を見て嬉しい。畏れ多くも皇后陛下の御下賜品をいただいて、皇恩の有り難さに感激したことと信じる。このような喜びを賜るのは、ひとえに君たち全員の父君が天皇陛下のために命を捧げたおかげである。君たちも、皇恩に奉応たてまつり、あらゆる困難を克服し、大東亜戦争を勝ち抜かねばならない』との、有り難いお言葉を述べられた。遺児代表・小柳安彦（福岡市高宮国民学校5年生）君は感激に満ちた言葉で奉答し、奈良会長の挨拶のあと同会長の発声で聖寿万歳を奉唱して一同敬礼、殿下にはご退場、一旦ご帰還なされた。この二つの式典は午前11時に終わり、全てが終了した。

そして、午前の式典に参列した遺児部隊は昼食を終えて解散、朝鮮、台湾、樺太、関東州、北海道、沖縄、鹿児島、長崎、宮崎、大分、青森、熊本の13支部だけが貸し切り列車で九段へと向かい、午後1時30分から順次、待ちに待った昇殿参拝を行った。一方、東宝劇場で午前を過ごした山形以下26支部の遺児たちは、昼食を終えた後に徒歩で日比谷公会堂へ赴いて、午後1時30分から午前とは異なる両式典に参列し、御下賜品伝達式の代表は永田喜也（大阪階行社学園5年生）君が、援護会式典の代表は田崎貞夫（秋田県桧木郡北部峯吉川国民学校5年生）君が、それぞれ答辞と奉答を述べた。

本庄総裁訓話

【東京電話】本庄軍事保護員総裁は 27 日、遺児部隊に対する皇后陛下御下賜品伝達式において、次のような訓話をされた。

皆さんが今から靖国神社に参拝して、神となられた父君を参拝することは大きな喜びであると考えます。皇室におかれては常に皇国の花と散られた勇士の体に深く思いを致されて、様々なご慈愛を賜られ、皇后陛下におかれてはこの度特にお菓子を御下賜くださいました。このようにしてくださった私にとっても、皆さんにとっても、共々畏れ多い喜びであります。皆さんは今から靖国神社に参拝して神殿で、広大な皇恩を賜った者として父君の前で、全心全力で勉学に励み立派な国民となって必ず父君の遺志を継いで参ります、と誓うならば、父君も、真の護国の勇士の息子だと満足され、皆さんの将来に揺るぎない〇〇〇〇（判読不可）。徹底して戦い勝利して、皆さんの父君にお見せしなければなりません。お母さんの教えをよく守り、兄弟仲良く過ごし、体と心を凛々しく保って立派な国民となり、一般の模範にならねばなりません。そうしてこそ、広大無辺の皇恩に対して万分の一なりともお返しが出来るのです。それが、正義のために命を捧げられた皆さんの父君への最大の親孝行になると信じております。

小泉厚相訓話

【東京電話】小泉厚生大臣は 27 日皇后陛下の御下賜品伝達式で、遺児たちの畏れ多い光栄に、次のように訓話をなされた。

畏れ多くも皇后陛下におかれましては、皆さんが靖国神社に参拝するに際して菓子をくださいました。広大無辺の皇恩に畏れ多くも感激の極みであります。英霊は神として合祀せよとの命によって天皇陛下の治配に浴することになるのは、実に畏れ多いことであります。日本人としてこれ以上の大きな光栄はありません。皆さんも、亡くなられた父君の遺志を継いで、成長した暁にはお国の為により大きな働きをなさることを望みます。これから戦争が何年続こうとも、いかなる艱難が降りかかろうとも、この大東亜戦争を闘い抜き、戦争の目的を達成しなければなりません。皆さんは今日の光栄と感激を胸に深く刻んで、祖父母と母君に孝行して、兄弟仲良く、勉学に励み、心身を鍛えてください。靖国の神の息子として恥ずかしくない立派な日本人になって、御国の為に尽力されることと信じております。

2. 目に浮かぶ父の姿

遺児たち感激の対面

靖国神社昇殿参拝の第一日

【東京電話】三月二七日は、全国の遺児にとっては生涯忘れられない感激の日である。遠くは関東州から、北は樺太、南は沖縄から上京し、式典に参列した名誉ある遺児たちの中に朝鮮、台湾、樺太、関東州、満州、北海道、沖縄、鹿児島、宮崎、大分、青森、熊本遺児部隊 1,336 名は、午後一時に厚生省の式典と軍人援護会の式典を終えて、すぐさま日比谷から貸し切りの市電 12 台に乗って九段下で降り、この感激と歓喜に満ちた胸を躍らせながら大鳥居をくぐり、護国の誓い固く父・兄と感激の対面をした。午後 1 時半には、朝鮮、

台湾、樺太、関東州、満州各支部の一団がまず昇殿参拝した。男女の代表各 1 名が玉串奉呈をするのに合わせて、社殿の前に頭を垂れて礼拝する遺児 64 名一人一人の胸を満たす限りない喜びに打ち震えながら「お父さん、私はこのように大きくなりました。毎日お母さんと一緒に一生懸命いて勉強しています。良い人間になる日を待っていてください」と、心から父に力強く呼び掛ける遺児たちの目には慈愛に満ちた父の影が去来して見えた。参拝を終えて各支部ごとに神門前で記念写真を撮り、遊就館と国防館を見学した後、白百合高等女学校の教室に同校生徒約 50 名の奉仕で、各方面から限りない感謝の愛情溢れる記念品を受け取り、感激的な社殿対面の 1 日を過ごした。

3. 勇気を出して戦っていこう

東条首相が後世に託す訓話

【南京電話】東条首相は 27 日午前 11 時からの靖国神社参拝記念式典で、大勢の遺児たちに対して次のような温情溢れる訓話をされた。

皆さんは今、感謝に満ちた光栄に、図らずも深い感激を禁じ得ないと思いますが、この光栄は、天皇陛下が、皆さんの父君が果たされた忠義を賞賛されたことと同時に、皆さんもまた、父君に負けなように御国のために力を尽くしなさいと畏れ多くも命じられたのであると拝察するのであります。ご存じのように、日本は今歴史上未曾有の大戦争中ですが、一般国民も軍人として、最前線で、また銃後の一人の人間として、国内において各々が天皇陛下のもとで心と力を一つに集めて鉄の塊のようになり敵米英に勝つために各層各業に従事しているのです。

この戦争は、大人だけが戦って簡単に結末になる容易い戦いではありません。少国民である皆さんが、米英の少国民より遥かに固い精神力を鍛錬して健全な精神を作り、立派な知徳をしっかりと持ち、国を背負って戦ってこそ、勝利できるのです。皆さんの頭にしっかりと刻んで欲しいことは、第一に皆さんの父君とその家族がどれほど多くの恩恵を皇室から受けているかと言うことと、第二に靖国神社の護国の神になられた皆さんの父君が、いつも皆さんの立派な成長を神社の中で見守っていてくださるということです。皆さんが熱心に勉強している間、寂しいとき、あるいは、自分思い通りに事が進まず心が傷ついたときも、必ず靖国神社にいらっしゃる父君の御霊に思いを馳せてください。すると、慈愛深い目で諸君を見守ってくださる父君が出てきてくださることでしょう。そして、諸君の心の中に必ずや勇気が湧いてきて、寂しさと落胆も消えてゆくことでしょう。皆さんもよく知っている「ビルマ」空中戦で壮絶な戦死を遂げた加藤少尉も、父君が日露戦争で戦死なさいましたし、その他にも、今大戦で御国のために輝かしい武勲を立てた方々の中には幼い頃に父君が戦死なされた気の毒な人も多いのです。この人たちが、このように良い人になれたのも、今、私が言った三つのことを胸深く刻んで、父親がいなくても、また、母親がいなくても、少しも臆することなく熱心に勉強した結果だと信じてください。諸君も心をついにすればこのような良い人になれるのですから、いつも先生の教えをよく聞いて、熱心に勉強して、お母さんの言いつけをしっかりと守り、これからも日本を双肩に担う良い日本人にならねばなりません。

4. 尽忠報国の決意

英霊の後継者たちの強固たる覚悟

【東京電話】南は沖縄、また北方は樺太から、我が父・我が兄が眠っている帝都東京の空を眺める全国の遺児 4,890 名幼い胸は、靖国神社を脳裏に描きつつどれほどこの日を待ったことか。『第五回遺児の日』は、27 日を初日に 29 日まで三日間、畏れ多くも御下賜品を下さり給いし皇后陛下の皇恩のもと、軍人援護会を中心に帝都全市民の赤誠を込めて意義深く展開されることとなった。この日の朝、市内 50 余箇所の各宿舎を出た遺児部隊は、午前 8 時 37 分全員が宮城前に次々と姿を見せ始め、宮城を奉拝する全遺児は英霊の後継者としての誇りを可愛い顔に表し、両の瞳を輝かせながら、援護会会長奈良大将の発声で慶寿万歳を叫ぶ尽忠報国の決意も固く、お父さん、お兄さんお聞きくださいとばかりに声を張り上げて唱すると、大内山に笏が静かに響いた。そして、全遺児 52 支部は二手に分かれて、朝鮮以下 26 支部は式典会館である日比谷公会堂へ、山形以下 26 支部は東宝劇場へそれぞれ向かい、初日の日程に入った。

5. この感銘を永く輝かせよ

朝鮮部隊の子ら父の前で固く誓う

【東京支社電話】全国 4,890 名の遺児たちが指折り数えて待っていたこの日 17 日に、靖国の父との待ち遠しかった社頭対面が深い感激のなかで行われた。午後 1 時 30 分、全国の遺児部隊の第一陣がまず昇殿参拝を終え、拝殿から降りてきた我が半島遺児 9 名の面々は感激の涙に濡れながらも靖国の子としてこの日この時の感銘を深く胸に刻み、明日の皇国を双肩に堂々と担う決心を固めた。また、母に託された様々な言葉や話をも、おそらく謹んで神殿に伝えたことであろう。この日、我が半島の遺児たちは午前 9 時に宮城前での奉拝を済ませ、日比谷公会堂での皇后陛下御下賜品伝達式に参加して御紋菓を拝受した後、昼食を摂ってから靖国神社へと向かった。昇殿参拝の 15 分前、数千の一般参拝者たちが温かい黙祷を捧げる中、遺児たちの先頭に立って靖国神社の大鳥居をくぐったのは我が半島遺児部隊ではないか。

『朝鮮』と青く染め抜かれた旗を翻して先頭に立ったのは、4,900 余遺児の中から特別に選ばれた蔡奎範君であった。昇殿参拝は、男子遺児の代表として白井君（大邱東雲国民学校在学）、女子遺児代表として楠元（平壤山手国民学校在学）嬢が、順に玉串を奉呈したが、この立派な軍国の子らは胸中、神殿でどのような言葉を報告したのか、聞いてみよう。

白井君『お母さんも元気でいらっしゃいます。兄さん（大邱中学二年生）は優秀な成績で進級することになり、久美姉さんも国民学校 3 年に進級いたします。弟の武も男らしくよく遊んでいます。私も来年は中学校に入る準備で、せっせと勉強しています』

蔡奎範君『お父さん、お母さんも元気でいらっしゃいます。私はこの春に京畿道商業学校に入学しました。これからもお父さんに負けない立派な国民になって、天皇陛下に尽忠報

楠元庸子嬢『大東亜戦争は日本がどんどん勝っています。お母さん、お爺さん、お婆さんも皆お元気です。兄さん（平壤中学校在学）は2年生、弟・良明は国民学校4年生。私もお母さんの仰ることをよく聞いて、せっせと勉強に励んでおります』

×××
 写真は（上）朝香之宮殿下ご臨席の下、第五回遺児靖国神社参拜式で奉答する小柳安彦君
 （下）皇后陛下御下賜品伝達式にて小泉厚相から下賜品の伝達を拝受する遺児代表
 ×××

満州梁川敏子嬢の扶助料を周旋

忠勲の遺児たちが父親と社頭対面をした 27 日前日の 26 日午後 2 時、首相官邸を訪れた満州遺児部隊とまみえた東条首相は、遺児たちの頭を一人一人撫でながら『お母さんは元気ですか、お兄さんたちも勇ましく仕事をしてられますか』などと温かい言葉をかけられた。そして、海軍服を着た少女の前で立ち止まり、腰をかがめて何か熱心に訊いた。

『.....』

『ほー、これは全くいけないことだ』

東条首相は『扶助料が届いていないのなら、どうなることやら。遺児の数が多いから、こういう失敗もあるのだと思う。ただの一人でも〇〇〇、話にならない。私がすぐに調査して送るようにします』と敏子さんに約束すると、一同は感激した。

=====

(『毎日新報』昭和一九年三月八日)

今春は各地方にて執行

【東京支社電話】 毎年『さくら』咲く四月を期して行われる靖国神社臨時大祭への遺児参

拝は今年の春で6回目を迎えるが、主催者側の軍人援護会では戦局が益々重大になりつつあることに鑑みて、遺児たちの上京参拝を中止し、代えて、来たる27日各地方の軍人援護会支部が主催し、各地で靖国神社参拝と変わらない厳粛で荘厳な式典を執行するように決定した。同日9時を期して宮城遙拝をした後、軍人援護会支部の式典の後に護国神社参拝を行うが、この式典は、まず援護会長の告辞を代読し、支部長の献辞、遺児代表の答辞で終わることになる。また、援護会支部管内に護国神社が所轄されている地方では道庁所在地の護国神社に参拝し、護国神社がない地方では学校や郡庁など適した場所に祭場を設置して、京城その他の支部でもこのような式典として、同日を厳粛に迎えることとする。なお、遺児たちの靖国神社昇殿参拝は昭和14年夏から始まり、参拝者は各々、国民学校56余名、高等科12余名、中等学校12余名が15、6歳未満の児童数で、今年の遺児数は6,456である。

=====

(『毎日新報』昭和二〇年三月二〇日)

8.靖国遺児たち昇殿参拝

お父さん、私がここへ参りました
二七日京城護国神社にて無言の対面

毎年一度、新祭神の遺児たちが靖国神社に参拝していた意義深い行事が今年も中止されたことから、この参拝行事への参列が決まっていた朝鮮関係27人の遺児たちは、27日京城護国神社に昇殿参拝し、新祭神として祀られる父と無言の対面をすることとなった。遺児達は25日に京城に集まり、28日までの4日間明治町一丁目の愛国寮で宿泊し、様々な意義深い行事に参加する予定。27日午前9時半からは、総督府第一会議室にて開かれる遺児に対する御下賜品の伝達式に参列するが、この式の前に、阿部総督、板垣朝鮮軍管区司令官、江藤政務総監以下軍関係者も参列して栄誉の遺児たちを激励する。続いて、午前11時半から護国神社にて昇殿参拝する。

| 軍人援護会本部にて有志家の記念寄付を受け付けます。 |

この行事の主催者である軍人援護会朝鮮本部では、遺児たちを真に歓待しようと準備中で、遺児たちを慰問激励し、同時に末永く遺児達が記念品として所持できる品物があれば民間からの寄贈も募っている。志ある人は、総督府社会課に申請されたし。

=====

reference

韓国中央図書館検索サイト

戦前の靖国神社遺児参拝関係の新聞記事

毎日新報（朝鮮語）、朝鮮時報（日本語）

大阪府立図書館所蔵

戦前の靖国神社遺児参拝関係の新聞記事

大阪朝日新聞外地版（復刻版）のうち朝鮮版（日本語）合本、ゆまに書房刊

大阪毎日新聞外地版（復刻版）のうち朝鮮版（日本語）合本、ゆまに書房刊

立命館大学図書館（O I Cライブラリー）所蔵

戦前の靖国神社遺児参拝関係の新聞記事

京城日報（復刻版）（日本語）合本、韓国教育史文献研究院刊

斉藤利彦著『「誉れの子」と戦争～愛国プロパガンと子どもたち～』（中央公論新社、2019年7月）

塚崎昌之「朝鮮人徴兵制度について1、2」（日本戦没学生記念会『わだつみのこえ』152号／2020年7月、153号／2020年12月）

塚崎昌之「戦前期一靖国神社朝鮮遺児集団参拝の概要」「遺児靖国神社集団参拝：朝鮮人遺児コメント・作文」（2021年4月4日、第244回15年戦争研究会報告）

松岡勲著『靖国を問う～遺児集団参拝と強制合祀～』（航思社、2019年9月）

松岡勲「子どもたちの靖国～戦後も「少国民」にされた戦争遺児たち～」(『翰林日本学』第37号、2020年12月)

abstract

전전(戰前) 조선의 야스쿠니신사 유아(遺兒) 참배

마쓰오카 이사오

군인의 원호조직인 은사재단 군인원호회는 전전의 야스쿠니신사 유아 참배를 1939년부터 1943년까지 매년 1회씩 거행했다. 참배는 일본의 도도부현(都道府県)과 해외식민지(대만, 조선, 만주, 관동주(關東州), 가라후토(樺太) 등에서 총 18,000명의 전몰자 유아가 야스쿠니신사를 참배했다. 1944년부터는 전국(戰局)의 악화와 공습의 심화로 야스쿠니신사에서 각지의 호국신사로 참배 장소를 옮겼다.

당시 일본의 식민지였던 조선에서도 1939년부터 1943년까지 5차례에 걸쳐 일본인과 조선인 전몰자 유아가 참여하는 형태로 실시되었다. 1944년, 1945년에는 전국 악화로 경성호국신사로 전몰자의 유아 참배가 바뀌었다. 이는 일본에 의한 조선의 지원병제도(1938년), 징병제도(1944년)의 실시와도 관련이 있다.

야스쿠니신사 유아 참배는 초등학교 5학년, 6학년의 전몰자 유아가 대상이었다. 참배 때 신문에 실린 작문과 코멘트를 게재했다. 구체적으로는 다음과 같은 일정으로 행해졌다.

- 니주바시(二重橋)에서 궁성 참배, 히비야(日比谷) 공회당 식전(公会堂式典) (후생성·군인원호회 주최, 황후로부터 ‘고몬카(御紋葉)’ 하사), 야스쿠니신사 승전(昇殿), 유슈관(遊就館) 견학, 도쿄 관광(메이지산궁·보물관·해군관 등).
- 조선·대만 유아는 한신(阪神)관광(이세산궁·카시하라산궁(橿原神宮)·모모야마릉(桃山陵) 등)과 세트였다.
- 조선인 유아와 일본인 유아는 함께 참배하였는데, 다마쿠시호텐(玉串奉奠)은 어느 해에도 일본인 유아가 거행했다.

이 글은 전쟁 중 조선의 야스쿠니신사 유아 참배 사실을 좇으며 조선의 식민지 지배 속에서 야스쿠니신사 유아 참배가 무엇을 의도했는지를 밝혔다.

■ keyword

야스쿠니신사, 조선인 전몰자 유아, 유아 참배, 식민지 지배, 은사재단 군인원호회, 조선총독부

■ 논문투고 2022년 04월 10일

■ 심사완료 2022년 05월 10일 (1차), 2022년 05월 25일 (2차)

■ 게재확정 2022년 05월 25일

abstract

戦前朝鮮における靖国神社遺児参拝

松岡 勲

軍人の援護組織である恩賜財団軍人援護会は戦前の靖国神社遺児参拝を1939年から1943年まで毎年1回ずつ行った。参拝は、全国都道府県と海外植民地（台湾・朝鮮・満州・関東州・樺太等）に及び総計1万8千人の戦没者遺児が靖国神社に集められた。さらに1944年からは戦局の悪化と空襲の激化によって、靖国神社から各地の護国神社に場所が移された。

当時日本の植民地であった朝鮮においても1939年から1943年までの5回に渡って、日本人と朝鮮人の戦没者遺児の参加の形で実施された。1944年、1945年は戦局の悪化によって、京城護国神社に戦没者の遺児参拝が変わった。これは日本による朝鮮への志願兵制度(1938年)、徴兵制度(1944年)実施とも関連する。

靖国神社遺児参拝は小学校5年生、6年生の戦没者遺児が対象であった。参拝時に新聞に掲載された作文とコメントを掲載した。

具体的には以下の行程で行われた。

- ・ 二重橋で宮城参拝、日比谷公会堂式典（厚生省・軍人援護会主催、皇后から「御汶菓」下賜）、靖国神社昇殿、遊就館見学、東京観光（明治神宮・宝物館・海軍館等）。
- ・ 朝鮮・台湾遺児は阪神観光（伊勢神宮・橿原神宮・桃山陵等）とセットだった。
- ・ 朝鮮人遺児と日本人遺児は一緒に参拝したが、玉串奉奠はいずれの年も日本人遺児によって行われた。

本稿では、戦中朝鮮における靖国神社遺児参拝の事実を追い、朝鮮の植民地支配の中で靖国神社遺児参拝が何を狙ったかを明らかにした。

■ keyword

靖国神社、戦没者遺児、遺児参拝、植民地支配、恩賜財団軍人援護会、朝鮮総督府

abstract

Korean Children's Visit to Yasukuni Shrine during Wartime

Isao MATSUOKA

The relief society of the Imperial Gift Foundation, an organization that aids soldiers, held a children's visit to Yasukuni Shrine once a year from 1939 to 1943. A total of 18,000 children of fallen soldiers from the Prefectures of Japan and its overseas colonies such as Taiwan, Korea, Manchuria, Kwantung Province and Karafuto Prefecture, commonly known as South Sakhalin, visited the shrine. Since 1944, the place of worship was changed from Yasukuni Shrine to gokoku shrines in various regions due to the worsening of the war and intensified air raids.

In Korea, which was a colony of Japan, the worship ritual was conducted five times between 1939 and 1943 with the participation of both Japanese and Korean children of fallen soldiers. Then, in 1944 and 1945, the place of worship for children of fallen soldiers was changed to Gyeongseong Hoguk Sinsa as the war situation worsened. This was related to Japan's implementation of the Volunteer Solider System (1938) and the Conscription System (1944) in Korea.

The target of worship of Yasukuni Shrine was the 5th and 6th graders among children of fallen soldiers. This paper presents their writings and comments in newspaper articles covering their visit to the shrine. Specifically, the worship ritual was carried out in the following process:

Visiting the Imperial Palace (Nijubashi Bridge); participating a ceremony at the Hibiya Public Hall (hosted by the Ministry of Health and Welfare and the Relief Society with the Empress' gift granting); entering the Sanctuary; touring the Yushukan; and touring Tokyo area (Meiji Jingu, the Gallery of Horyuji Treasures and the Imperial Naval Academy).

Touring of Hanshin by Korean and Taiwanese children (Ise Jingu, Kashihara Jingu and Mausoleum of Emperor Meiji at Fushimi Momoyama).

Worshiping by Korean children together with Japanese children with “Tamabushi,” a shinto offering, always done only by Japanese children.

This paper traces the fact that Korean children worshiped at Yasukuni Shrine during the war and reveals the intention of the visit to the shrine during the colonial rule of Korea.

■ keyword

Yasukuni Shrine, Children of Korean Fallen Soldiers, Shrine Worship by Children, Colonial Rule, Relief Society of the Imperial Gift Foundation, Japanese Government-General of Korea.